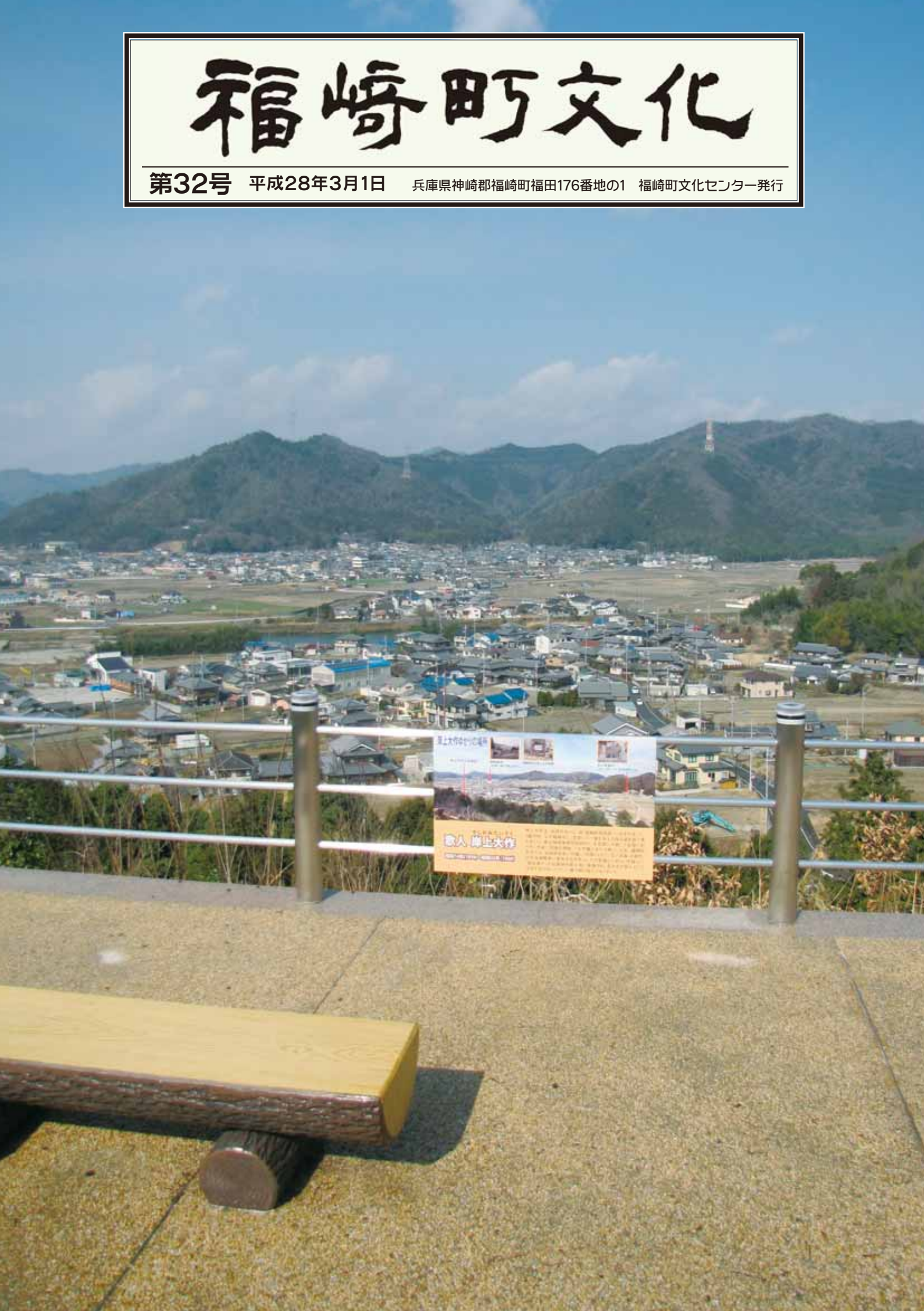
福崎町文化

第32号　平成28年3月1日　兵庫県神崎郡福崎町福田176番地の1　福崎町文化センター発行



歌人岸上大作

姫路文学館学芸員　竹廣裕子

一枚の写真

一枚の写真がある。細い指を神経質に組みながら、卓上のカーネーションにどこかうつろで不安気な視線を送る青年。最もよく知られている歌人岸上大作の肖像である。撮影されたのは、昭和三十五年九月二日。当時、岸上大作は新鋭歌人として注目されており、その他の若手歌人たちとの座談会にのぞんだ際の一枚である。じつはこの写真、よく見ると、眼鏡のレンズが割れているのがわかる。

この年、日本は日米安全保障条約の改定にあたり大きく揺れていた。国会議事堂では連日のように大規模な抗議行動が繰り広げられていた。六月十五日の夜。国会構内に突入したデモ隊と警官隊の間に、激しい衝突がおこり、そのなかで東大生の樺美智子が命を落とした。この日、雨に濡れてスクラムを組んでいた学生たちの中に岸上大作もいた。振り下ろされる警棒から逃れようとして彼は後頭部に傷を負い、眼鏡のレンズは割れた。

血と雨にワイシャツ濡れている
無援ひとりへの愛うつくしく
する

近現代の名歌としてもたびたび採り上げられてきた岸上大作の代表歌は、この強烈な体験から生まれたのである。

こうして壊れた眼鏡を岸上はその後も直さずにかけていたらしい。「六〇年安保」を象徴するあの雨の夜、あの場所にいたことを証明する、それはこの若者にとって勲章のようなものであったのかもしれない。

詩人や作家の肖像写真には、たとえば中原中也のように、その人物の資質がそのまま映し出されたかのような深い印象を与えるものがあるが、岸上大作の写真もまた、この青年の人物像を切ないまでに訴えかけてやまない。そしてさらに、これが彼の生前最後の姿となった。この写真が撮られてから約三ヶ月後、岸上大作は闘争の敗北と失恋を理由に、二十一歳の若さで自らの命を絶ったのである。

その死から五十五年。昨年（平成二十七年）、辻川山の上に岸上大作を顕彰する「望郷の丘」が完成した。

岸上大作

この展望台には、岸上の短歌が数多く紹介されている。彼が高校一年生から大学三年生までの六年間に詠んだ歌は五六九首。これが生涯に残した歌の全てである。

これらの歌が、どのような背景のもとに生まれたか、その二十一年の生涯の物語をたどってみよう。

父の戦死

岸上大作は、昭和十四年十月二十一日、福崎町西田原に父繁一・母まさゑの長男として生まれた。昭和十七年に出征した父は、昭和二十一年内地に戻ってきたものの横須賀で発病し、そのまま帰らぬ人となった。大作六歳の時のことである。

五月雨の中、泣きながら父の位牌を抱いていた記憶は、後年岸上にとって重要な創作のテーマとなった。

白き骨五つ六つを父と
言われわれは小さき手を
あわせたり

白き位牌持てと言われて
泣きわめきし父葬る日の
吾は一年生

また、父の記憶をほとんど持たない岸上にとって、父に愛されていたことをたしかに感じることのできるものが、戦地から届いていた幾枚かのはがきであった。

父ちゃんはお国のために元気よく戦っているよと書きましし父
五つのわれ文字覚えしをほめて
あり戦地の父の最後のたより

左から大作、母まさゑ、妹佳世

いだとさとり、いつしか社会の矛盾について目を向けるようになった。

田原中学校に入学すると、教師の影響で政治に興味を持つようになった。昭和二十八年十一月二十五日付の毎日新聞朝刊には、「戦犯送還を機にソ連と講和を」と題して「兵庫県・中学二年生　岸上大作」という署名入りの投書が掲載された。

その反米親ソ的な内容は校内でも問題となったという。また、生徒会活動にも積極的に参加するようになり、三年生の時、自ら立候補して書記長となった。当時の岸上は、生徒会報に他の生徒の生徒会への無理解、無関心を糾弾する主張を独断で掲載するなどして、生徒側からも教師側からも批判を受けることがあったという。その過剰なまでの熱意と使命感は、どこか周囲から浮いてしまうようなところがあったようだ。それでも卒業の際には、生徒会活動に貢献した功により特別賞を受けている。

母まさゑは、懸命に働き女手ひとつで大作と妹佳世を育てた。その姿を見て成長した少年は、幼い頃から、家の貧しさは、父の戦死のせ

短歌への夢

福崎高校に入学すると、文芸部に入り、友人たちと競い合って小説や短歌などの創作を始めた。

しかし、中学時代の生徒会活動への傾倒と同様に、ここでもやはり、友人たちと岸上が決定的に違っていたことがある。それは、文学に賭ける思いの強さ、切実さである。

彼は小説を書き始めたばかりでいきなり人気作家の丹羽文雄に作品を送りつけ、じりじりとして返事を待った。しかし四ヶ月後、丹羽からの返事（作文に過ぎないといった評価だったらしい。）が届いたときには、岸上の関心はすでにすっかり短歌に移っていた。

七月十日の日記に、彼は次のように書いている。

自分の歌は、未熟だ。だがぼくの進む道は歌の道だ。本当に歌が好きならきっといつかは立派な歌が作れる。

十六歳にして自らの道をみつけた岸上は「高校時代」「高校コース」「若人」などの雑誌に投稿をはじめ、入選の常連になっていった。

わが歌の活字となりし嬉しさよ
二度三度と声上げて詠まん
想うこと半分も言えぬ吾が性を
悲しと思い歌に託せる
歌一つ作りしことがかくも嬉し
今宵すがしくねむらんとする

地元の歌人木村真康の主宰する短歌誌「文学圏」に唯一の高校生として加わったり、早稲田大学教授の歌人・窪田章一郎が主宰する短歌結社「まひる野」に入会するなど、その内向的な性格とは裏腹な行動力を見せ、短歌という文芸に自らの将来を夢見るようにさえなった。

当時の彼が繰り返し詠んだのは、幼い頃から見つめつづけてきた働く母の姿であった。

メキメキと身体が鳴ると夜ごと
言う十時間働き縄なう母
残業の手当に母がもらい来し
十円のパンにつけるわらくず
ひっそりと暗きほかげで夜なべ
する母の日も母は常のごとくに

そんな高校時代に岸上大作が残した代表歌の一つがある。かつて高等学校の現代国語の教科書に採用されていた一首である。

かがまりてこんろに青き火を
おこす母と二人の夢作るため

この歌は、新しい年を迎える準備で、おせち料理の煮しめなどを作るために、真新しい炭を買ってこんろに火をつけるときのささやかなよろこびを詠ったものだという。

余談だが、この歌、じつは福崎高等学校にある歌碑では「赤き火」となっている。岸上は「青き火」として「まひる野」に投稿したのだが、師の窪田章一郎が「赤き火」に添削したのだという。したがって教科書にも「赤」のほうで採用されているのだ。

また、この頃の岸上は、寺山修司ら若き歌人たちの活躍に触発され、高校生雑誌の入選常連になっていた同世代の仲間を集めて同人誌の創刊を計画したこともあった。この時、連絡をとった一人が、龍野高校出身で当時國學院大学に在籍していた高瀬隆和だった。高瀬の回想によると、はがきで連絡をしてきた岸上に、じっさい会ってみると、はがきの文面の雄弁さとは打って変わり、うつむいてほとんど話そうとしない様子に驚いたという。それでも、この時に始まった高瀬との友情は、岸上にとってかけがえのないものとなった。なぜならこの高瀬こそ、岸上の没後、その遺作集『意志表示』を世に出し、長きにわたって岸上の遺した資料を守り、亡友の顕彰にその半生を捧げることになる人物だからである。

福崎高等学校卒業の日

大学進学
―大都会の孤独

高校卒業をひかえ、経済的な理由から、一度は就職を考えたこともあったが、東京で文学を学ぶという夢をあきらめきれず、奨学金を受け國學院大学へと進学した。さっそく「短歌研究会」にも加わった。

しかし、部活動をはなれると、友人は全くできず、大学のクラスでは常に孤立していた。ひとり街を歩き回り、古本屋をめぐり、映画を観て、アルバイトでわずかな金銭を得る日々。大都会のなかの孤独を彼は味わいつくした。遠く離れた故郷の母から届く仕送りには、身体の弱い息子を気遣う手紙がいつも添えられていた。母との手紙のやりとりを詠った歌は数多い。

皺のばし送られし紙幣夜となれば
マシン油しみし母の手匂う
幾枚の紙幣のための疲れにて
母に告げんにあまりに小さき
口つけて水道の水飲みおりぬ母
への手紙長かりし夜は

岸上の没後、その遺品の中からたくさんの現金書留の封筒が見つかった。母からの仕送りの入っていた封筒である。一人息子が卒業して故郷で教師になってくれることだけを楽しみにしていた母。その思いを知りながら、親不孝を続けた岸上であったが、さすがにその封筒は捨てることができなかったのだ。

この母からの手紙と、封筒の束は、姫路文学館で、岸上大作展を開催するたびに、最も多くの女性の涙をさそう資料となっている。

ひとりよがりの恋

岸上はいつも自分をあたたかく包み込んでくれるような恋人の登場を待ち望んでいた。それは、中学時代からずっと彼の中に根ざす強い願望であったといえる。しかし、彼の片思いはいつも痛ましいほどにひとりよがりなものであった。

美しき誤算のひとつわれのみが
昂ぶりて逢い重ねしことも

俳万智も『あなたと詠む恋の歌百首』という本で採り上げている、岸上のかなしい恋歌である。好きな人と何度も会うなかで、自分だけは特別な逢瀬のように舞い上がっていたが、相手には少しもそんな気持ちが無かったことを「美しき誤算」と詠んだ。このように岸上は相手に思いさえ伝えられないまま勝手に自滅するような失恋を重ねたのである。

二十歳の夢

二十歳を迎えようとする岸上には、ひとつの計画があった。十代で作った歌をまとめた一冊の歌集を世に問うことである。岸上には、十代のうちに何かを成し遂げたいという強い野望のようなものがあった。その計画を裏付ける一枚のメモが残されている。

歌集名は「生まれ出ようとして」。出版日は、昭和三十四年十月二十一日、つまり岸上の二十歳の誕生日である。序文、解説の執筆者、装丁担当者をはじめとして、出版資金の捻出方法までが事細かに記されている。ちなみに資金はすべて友人、知人、恩師などからのカンパをもくろんでいたらしい。当時、この計画を聞かされた友人らは、真に受けなかったようだが、このメモを見ると岸上がいかに真剣に歌集出版を計画していたかがわかる。しかし、むろん出版はできなかった。その夢の実現を信じていたのも、それがかなわなかったことを悔しく思ったのも、おそらく彼一人だけであった。

最後の一年―新鋭歌人として

こうして、岸上大作にとって最後の一年となる昭和三十五年が始まった。岸上は、不思議な年賀状を友人たちに送った。

死なうと思ってゐた。ことしの正月、よそから着物を一反もらつた。お年玉としてである。着物の布地は麻であつた。鼠色のこまかい縞目が織こめられていた。これは夏に着る着物であらう。夏までゐようと思った。

太宰の〈晩年〉から１９６０年１月１日にかきぬく。今年の最初におくることばする。

〈岸上大作〉

岸上は、ふだんからよく「死」を口にしたという。だから友人たちも、いつもの岸上流の冗談で、まさかこの年の終わりに本当に彼がいなくなろうとは想像もしていなかったであろう。

そして四月。彼の前に短歌研究会の新入部員として、理想に描いていたような聡明で美しい少女があらわれた。そしてまた恋が始まった。

岸上大作は、前掲の「血と雨に…」などの歌によって、学生運動の熱心な闘士のように思われることもあるが、じつは彼がデモに参加し始めたのは、この年の五月に入ってからのこと。彼の代表歌として知られる

意志表示せまり声なきこえを背に
ただ掌の中にマッチ擦るのみ

この一首が生まれたのは四月二十七日未明だった。四月二十六日、国会において学生たちの激しい抗議行動があり、夜のニュースでしきりに報じられたらしい。岸上は、ラジオでその報道を聞き、行動していない自らへの焦燥感のなかで「意志表示」一首を詠んだのである。

呼びかけにかかわりあらぬビラ
なべて汚れていたる私立大学
流されし血を負目としいちにちの
記事と語るな彼らの世界
幅ひろく見せて連行さるる背が
われの解答もとめてやまぬ

つまり、岸上は高揚感とためらいの中で、安保闘争の熱気にのみこまれていった当時の多くの学生たちの一人にすぎなかったのである。

そして、彼はデモに加わるようになった。思いを寄せる少女も先輩である岸上とともに行動していた。彼のなかで、安保闘争への参加と恋愛感情の高まりは、まったく軌を一にするものであった。

そんな時、「國學院短歌」に発表したエッセイが、角川書店「短歌」編集者の眼にとまり、短歌作品の依頼が舞い込んだ。その依頼に応じて作ったのが、「血と雨に…」の歌をふくむ「黙禱　6月15日　国会南通用門」七首であった。

ヘルメットついにとらざりし列の
まえ屈辱ならぬ黙禱の位置
むしろ弱く繃帯さらす地下街に
わが狭量もさらされていん

六月十五日の出来事を、岸上は自らの二つ目の戦争体験だとしていた。つまり彼らの世代にとって、安保闘争は、多くの肉親を失った第二次世界大戦につづく、もう一つの戦争体験なのだという意味づけである。これらの歌は、編集者の期待をじゅうぶんに満たすもので、「短歌」八月号に掲載された。

さらに高校時代からの念願であった「短歌研究」新人賞に「意志表示」五十首を応募したところ、「推薦作

品」に選ばれた。

二十一歳の死

こうして岸上大作は、安保闘争を鮮烈に短歌に詠みこんだ学生歌人として一躍注目されることとなった。若き歌人として歌壇に颯爽と登場すること、それは短歌を始めたときから、夢に描きつづけてきた一つの成功のビジョンだった。ここから亡くなるまでの五ヶ月ほどの間は、毎月のように総合短歌誌に作品や評論などを発表した。

この年の夏休み、岸上は福崎に最後の帰省をしているが、その間もまるで理論武装を急ぐかのように、多くの社会科学系の本を読むことを自らに課していたようだ。一方で、この活躍が彼を疲弊させていった。

十一月、大学祭の一環として、詩人吉本隆明の講演会を企画した。当時、吉本はあの六月十五日の国会構内抗議集会で演説し逮捕されるなどして、若者たちの絶大な支持をあつめる詩人であった。ところが、岸上が作った「革命の詩人、吉本隆明きたる」というビラが大学当局の目にとまり、中止勧告をうけてしまう。彼はたった一人でこの問題の処理にあたり、結局は勧告に従うことになる。この事は、権力に屈するという屈辱的な敗北として位置づけられ、大きな傷となった。その頃の日記には「自らの弱さに嘔吐しながら弱さにおぼれている」と記している。

やがて嵐のような一年が終わりに近づき、彼が自らの全存在を賭けて行った二つの行動、つまり安保闘争と恋はどちらも虚しい終息を迎えようとしていた。岸上の一方的な思いから発せられた言動は、まだ十九歳の少女を傷つけ、恐れさえ抱かせてしまったのだった。

断絶を知りてしまいしわたくしにもはやしゅったつは告げられている

生きている不潔とむすぶたびに切れ

ついに何本の手はなくすとも

そして、彼はついに「生きている不潔」に堪えきれなくなり、その内部でいつしか輝かしいものとなっていった死を選ぶことになる。

岸上が命を絶ったのは、十二月五日未明のことだった。死の七時間前から直前まで書き連ねた絶筆「ぼくのためのノート」を読んだ吉本隆明は、「失恋だと書いたり、弱かったのだと書いたり、また故意に道化てみせたりしているが、もっと奥深いところから彼を誘って死におもむかせたのは、彼の「遺書」の裏側を流れている巨きな時代的契機であったような気がする。」と書いている。二百字詰原稿用紙五十四枚に及ぶこの絶筆は、彼が生前に残した最も長い「作品」となった。

五十年目の墓参

平成二十二年十二月五日。岸上没後五十年目の命日に、福崎町西田原にある彼の墓に参るひとりの女性の姿があった。彼女こそが、岸上が全存在を賭けて愛した女性、歌人沢口芙美その人であった。その日の午後、姫路文学館で開催した没後五十年記念の福島泰樹講演会に来てくださった沢口氏から、その墓参の話を聞いたとき、思わず胸が熱くなった。自らの死によって、とてつもなく重い荷を負わせた少女との再会に岸上の霊はどれほど慰められたことだろう。

岸上の墓は日のあたる小高い斜面に立っている。両側には父と母の墓碑が立つ。昨年五月、出来たばかりの「望郷の丘」から、あらためてその場所を望んだ。彼の死によって深く傷ついた多くの心も、半世紀の時がようやく癒してくれたのではないだろうか…そんな思いが湧く、明るくやさしい風景が眼前にひろがっていた。

福崎町の「旧聞異事」・「播磨国風土記」を楽しむ

播磨学研究所運営委員兼研究員
埴岡真弓

一、「播磨国風土記」について

京都の公家、三条西家に伝えられていた「播磨国風土記」の写本が世に広く知られるようになったのは、嘉永五年（一八五二）国学者谷森善臣がその写本を筆写することを許されて以降のこと。「播磨国風土記」の写本は国宝に指定され、現在は天理大学附属天理図書館に所蔵されています。一三〇〇年前の国勢調査ともいわれる「風土記」（この呼称は平安時代以降）。常陸・播磨・出雲・肥前・豊後の五風土記だけがほぼ完全な姿を留めていることはよく知られていますが、その中でもっとも遅く発見されたのが「播磨国風土記」で、研究が始まったのは明治になってからのことでした。その代表的な著作の一つが、福崎町とゆかりの深い井上通泰の『播磨風土記新考』です。風土記研究に大きな足跡を残す通泰の研究は、弟柳田國男の勧めによるものだったとか。

和銅六年（七一三）に出された官命は、地名に「好字」を付けること、産物・土地の肥沃度・地名由来・古老が伝える「旧聞異事」という四つの項目の調査を命じるものでした。産物、土地の肥沃度が租・庸・調を納めさせる朝廷にとって大事なことは容易に想像が付きますが、後の二項目は現代人にとっては政治と無関係にも思えるものです。二項目としましたが、山や川、野原などの名前がどのようにして名付けられたかは当然その土地の古老の言い伝えを聞き取って記録するわけですから、風土記の地名由来イコール「旧聞異事」と言っても差し支えないでしょう。風土記の地名由来の多くは、神々や天皇、氏族の事蹟によって名付けられたとするものです。「古事記」「日本書紀」と同じように、古代の人々にとってそれらの物語は歴史そのものであり、地方の歴史を知ることはその地方を治めるために必要だという考えから「旧聞異事」の蒐集が命じられたのではないでしょうか。

こうして記録された「旧聞異事」の数々は、当時の歴史や文化、人々の暮らしを知るための貴重な手掛かりといえます。風土記の時代にあった播磨国の十二の郡（こおり）の内、残されているのは十郡の記録ですが、幸い福崎町が属した神前（かむざき）郡はその中に含まれています。六つの里があり、記載順に並べると聖岡里（神河町周辺）・川辺里（市川町周辺）・高岡里（福崎町周辺）・多駝里（姫路市山田町、福崎町八千種周辺）・蔭山里（姫路市豊富町周辺）・的部里（姫路市香寺町周辺）となります。揖保郡や飾磨郡に比べると話の数は多くありませんが、遺称地とされる地名がいくつも残っています。神前郡を中心に、奥深い「播磨国風土記」の世界を覗いてみたいと思います。

写真１　神前山（千束山を含む）

二、「神前郡」の郡名由来

「神前郡」の記載は、他の郡と同様に、まず郡の名前がどうして名付けられたのかという郡名由来から始まります。

右、神前と號くる所以は、伊和の大神のみ子、建石敷命、神前山に在す。乃ち、神の在すに因りて名と為し、故、神前の郡といふ。

つまり、建石敷命という神がおられるので神前と名付けたというのです。そして、この神の父神とされるのが「播磨国風土記」のみに登場する伊和大神、「播磨の国の神」とも称される興味深い神です。主に揖保郡、宍禾郡で活躍する神で、宍禾郡がもとは揖保郡であったことを考えると、揖保川流域で特に信仰を集めた神と考えられるでしょう。この神を祀る人々の本拠地は、宍粟市一宮町周辺、播磨の一宮であった伊和神社が鎮座している地域とされています。国占めをするため播磨各地を巡り行く姿が伝えられており、渡来系の神とされる天日槍命と国占め争いをするエピソードをいくつも残しました。

多駝里糠岡にも、伊和の神と天日槍命が「各、軍を発して相戦ひまし き」と記されています。また、「天日槍命、軍、八千ひとありき。故、八千軍野といふ」というのが現在の福崎町八千種の地名由来です。「軍」という文字が使われているのは神前郡の記載だけで、市川流域で激しい国占め争いが行われたことを示しているのかもしれません。市川の下流域、現在の姫路市東南部、手柄山付近を中心とする地域は飾磨郡伊和里と呼ばれていました。「積幡(しさわ、他は「宍禾」と表記）の郡の伊和君等が族、到来たりて此に居」たため名付けられたと記されており、政治を司る国衙が置かれた姫路市中心部まで古くは伊和大神の信仰が広がっていた、伊和大神を祀る氏族によって支配されていたと推測されます。

では、そうした強い勢力に信奉された伊和大神の御子神という位置づけは、何を意味しているのでしょうか。伊和大神の御子神は、建石敷命だけではありません。郡の記載中に記すと、飾磨郡英賀里の阿賀比古命・阿賀比売命、揖保郡林田里の伊勢都比古命・伊勢都比売命、同郡出水里他の石龍比古命・石龍比売命。どの御子神にも母神の記載はなく、伊和大神の子であるのみが記されています。阿賀比古命・阿賀比売命（表記は違うがいずれも「あが」）、伊勢都比古命・伊勢都比売命（姫路市林田町に上・下伊勢あり）はその土地の地名を冠しており、土着の神であったに違いありません。英賀里、林田里を伊和大神勢力が支配下に置いた時、神々の体系も変更を余儀なくされた、つまり、そもそも祀られていた土地の神が御子神という形で伊和大神の下位に位置づけられたのではないでしょうか。

神前郡域で広く信仰されていた神だった建石敷命もまた、伊和大神を祀る氏族が宍禾郡から神前郡まで勢力を伸ばしてきた時期があり、御子神という伝承が残ったのではないかと考えられます。ただ、建石敷命以外の御子神はすべて、伊邪那岐・伊耶那美（「古事記」表記）の神と同じように男女二柱の神となっており、男神のみの建石敷命は特色ある御子神といえるでしょう。対となる男女二柱の形は、荒御魂・和御魂という神の御霊の持つ二面性と関わっているのかもしれません。

また、建石敷命は、神前郡だけでなく、現在の加東市・加西市に相当する賀毛郡にも登場している点が注目されます。賀毛郡では「建石

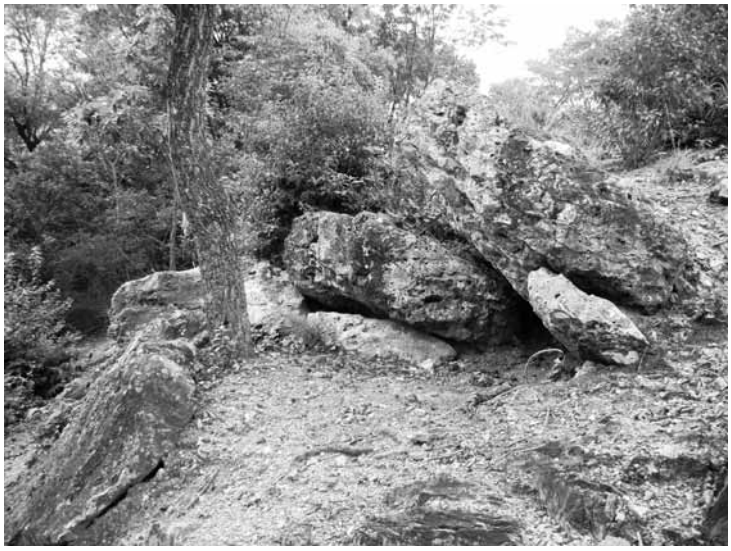


写真２　神前山の磐坐

命」と表記されていますが、建石敷命と同一の神ではないかと考えられています。都麻里の条には、昔、讃伎日子の神が丹波の冰上刀売に求婚し、断られたにもかかわらず強引に求婚を重ねたため、冰上刀売が立腹して建石命を雇って戦ったと記されています。また、法太里では、讃伎日子と建石命が戦った時、讃伎日子が負けて手をつき匐って逃げたという話や、讃伎日子が逃げる時に建石命が坂に御冠を置いて堺としたという話が載っています。こうした伝承から、建石敷命は軍神としての信仰が強かったのではないか、建石敷命を祀る神前郡の人々の勢力が賀毛郡にまで伸びていた時代があったのではないかと推測されます。

三、建石敷命という神

建石敷命のいます神前山は高岡里にあるとされ、現在も福崎町山崎に同名の山が存在します。麓に二之宮神社が鎮座しており、その峰は柳田國男が元は「洗足」ではなかったかと述べた「千束山」へと続いています。柳田は市川をまたいでヌッと表れる巨大な足の伝承を語り、汚れた足を洗えと命ずる妖怪「足洗い」の影に播磨の国を巡り歩いた神の姿を見ていますが、その指摘にはやはり鋭いものがあります。その神前山の山頂にあるのが、磐坐とされる大きな岩です。高岡里を一望する山頂は、神を祀るに相応しい場所といえるでしょう。

建石敷命は、その名が示すように「石」に対する信仰を基盤とする神だったのではないでしょうか。揖保郡出水里の石龍比古命・石龍比売命もその名に「石」を冠しており、重要な神の属性を示していると考えられます。石龍比古命・石龍比売命を祭神とする神社としては、たつの市揖西町に鎮座する式内社・祝田神社が有名ですが、同市の龍野町日山に鎮座する粒坐天照神社の奥宮とされる天祇神社（台山の山中）には石龍比古命・石龍比売命と伝えられる二つの立石が祀られています。風土記時代に遡るものとすることは難しいでしょうが、台山は最近「粒丘」の候補地の一つとされる場所であり、天祇神社の伝承も注目されます。

建石敷命の父神とされる伊和大神の名前自体、「いわ」即ち岩・石の音から生まれた神名だとも考えられます。平成二十五年に執行された二十年に一度の「三ツ山大祭」は姫路の射楯兵主神社、播磨国総社で行われましたが、江戸時代の記録には総社の三ツ山・一ツ山大祭は一宮である伊和神社の三つ山・一つ山の神事を模したものだと記されています。この伊和神社の三つ山・一つ山の神事は高畑山・花咲山・白倉山の三山、そして宮山という山を祀るもので、それぞれの山中にある磐坐の祠を六十年に一度、二十年に一度新しいものと取り替えます。つまり、自然の山に対する信仰、その神体は磐坐であるわけですが、これが本来の三つ山・一つ山だというわけです。また、伊和神社本殿裏には二羽の鶴が化したとされる二つの石、「鶴石」が大切に祀られており、神社の由緒にまつわる一種の磐坐と考えられます。

写真３　立石神社の巨岩（神河町）

石・岩に対する日本人の信仰について、柳田國男も「石神問答」など多くの著作を残しました。「神々の我慢比べ」として喧伝されている、神前郡聖岡里の大汝命と小比古尼命の話にも石・岩が登場します。この二柱の神の「聖と屎とは、石と成りて今に亡せず」とされ、今も日吉神社（神崎郡神河町）の裏山には「埴岩」と呼ばれる巨岩がそそ

り立っています。建石敷命との関連で興味深いのは、神河町宮前に鎮座する立岩神社です。「たていわ」という神社名と神名との共通性もありますが、この神社の本来のご神体と思われるのは川を隔ててそびえる巨岩、巨岩というより巨大な岩盤なのです。かつてはその上に祠があったといい、今もその巨岩の上に咲く植物を取ると祟りがあるという言い伝えがあるとか。その存在感は圧倒的で、古代の人々がこうした巨岩・巨石に対して深い信仰を抱くのは自然なことでしょう。

石に対する信仰の本質を考えさせる伝承が、「播磨国風土記」にはいくつも残されています。たとえば、伊和大神の御子神として取り上げた石龍比古命・石龍比売命の出水里の伝承は、この男女二柱の神が水争いをしたというものです。伊和大神自身にも、宍禾郡安師里で求婚を断られて腹を立て、石で川の流れを塞き止めたという伝承が残っています。これらの神々が水を支配する力を持っていたと解釈できる伝承です。石龍比古命・石龍比売命と伝えられる石神が立つ天祇神社には小さな泉があり、昭和三十年代まで雨乞いが行われていたと聞きました。粒丘では伊和大神が杖を挿したところから「寒泉」が流れ出たと、風土記には記されています。水は農耕に不可欠であり、古代の人々にとってその重要性はより大きかったことでしょう。旱魃、洪水などなど、水にまつわる自然現象は神々の仕業として理解されていました。石神の属性に水の支配があると考えられることは、伊和大神をめぐる様々な伝承を読み解く鍵の一つではないでしょうか。建石敷命についても考える際にも、手掛かりとする必要がありそうです。

「播磨国風土記」に書きとどめられた「旧聞異事」全てが、古代の歴史や文化を様々な角度から検討するための貴重な手掛かりといえるかもしれません。一三〇〇年前すでに伝承となっていたのですから、もっともっと古い時代の記憶が風土記の中には閉じこめられているわけです。古墳時代にまで遡る記憶があるとも考えられています。物語として楽しむだけでなく、風土記の伝承を手掛かりに現地を訪ね、今も息づいている古代の人々の想いに触れ、自分たちの身近な歴史や文化を発見、あるいは再発見してみませんか。

20年間の文化行政の取組み

嶋田　正義

Ⅰ．辻川界隈を中心にして

1995年12月18日から2015年12月17日までの20年間、町長として役場に勤めました。

これからの20年といえばずいぶん長いように思いますが、過ぎ去った20年はアッという間でした。

福崎町は柳田國男五兄弟、吉識雅夫、岸上大作、松岡義之など文化・スポーツで優れた人材を生み育てました。

2万人弱の小さな町ですが文化勲章受章者　柳田國男、吉識雅夫の2名を名誉町民に持ったことは大変な誇りであり、大いに自慢していいと思っています。

福崎町第5次総合計画のまちの将来像は「活力にあふれ、風格のある、住みよいまち」となっています。優れた先輩を持った幸せをしっかりと胸に持ち、その業績を受け継いで更に伸展させる思いで「風格のあるまち」づくりを目指していきます。

1．情報公開と職員の資質の向上

町政運営で何が大切かと問われれば、迷うことなく、情報公開と職員の資質の向上と答えることにしています。

日本国憲法は、国民こそ政治の主人公と主権在民をしっかり明記しています。主権者である町民に役場の持っている情報をオープンにすることは当然のことです。知識や情報を共有してこそ町民からのいい提案が生まれると思います。

住民サービスの向上とよくいいますが、その担い手は町の職員です。町職員の資質が向上すれば、きっとサービスも向上すると思います。

2．弁証法的に考える

私は職員教育の中で哲学の学習を重視しました。私は自分自身に、哲学、経済、歴史の勉強を課していますが、職員にも同じことを求めました。中でも弁証法的なものの見方、考え方についてよく話をしました。

弁証法的な見方は、事象を動きの中で理解することであり、ものごとは関連の中で見ることです。

今日の福崎町は昨日までの歴史の積み重ねによって形作られているのです。明日は今日よりもより良い福崎町にしていこうと考えることです。福崎町は決して孤立しているのではなく、上下左右の関係の中で生きていることを常に意識することが大切です。国政や県政との関係、市川町や姫路市とのつながりの実態を深く見きわめることで、福崎町をより鮮明に知ることができるのです。

3．量的変化から質的変化へ

より高い質へと発展させるためには量的変化の努力を積み重ねないと達成できないことを弁証法を学ぶ上で理解しました。

その例を辻川界隈のまちづくりを例にとって書きますと、次のようになります。

辻川界隈は福崎町の文化行政を進めていく上で、大切な場所であるとの認識で早くからいろいろの取組が進められています。

柳田國男・松岡家記念館の運営、郡役所や柳田國男生家の保存などは、その代表的な例です。

しかし、今のままでは、福崎の文化の中心地、観光地として世に問うことには、さみしさがあります。どうすればいいのかと考えると、柳田國男兄弟の功績、三木家、辻川山、鈴ノ森神社などを活用する地産地消で、まずは量的変化を促進することが考えられます。

そうした思いで取り組んだ事業を思いつくままに列記しますと、次のようなものがあります。

思い出に残る辻川での事業

① もちむぎのやかたの存続

20年間、片時も気が抜けなかったのが、もちむぎ食品センターと、もちむぎのやかたの運営です。「町長になってほしい」と要望に来られた人たちの三つのお願いの一つが「もちむぎ食品センター運営改善」でした。町長になって調べてみると、事務職による3億7800万円の不正経理が発覚しました。被害額が大きいので、廃社の声が多数でしたが、私は存続の声を支持しました。ただちに存続の立場から専門家を交えた検討委員会を設置し答申を出していただきました。それ以来、今までこの方針にそって運営を続けてきました。私の経営力の不足によって再建が遅れていますが、今年度は利益が出る会社として引き渡しすることができました。

② トイレの建設

「トレイは文化」と私はいつも思っています。

そして、集客を考えるなら、トイレは避けて通れない課題でした。

町幹部会で取り上げてもらい建設することになりました。課長は休日も利用して各地のトイレをまわって立派な設計図を描いてくれました。議会委員会に諮ると、立派すぎるとクレームがつきました。これからはいいトイレが必要ですと説明し、トイレの必要性は認めてもらいましたが、かなり設計額は縮小され、今のトイレとなりました。私は今も残念な気持ちを持っています。

トイレはこのほかにも、福崎駅広場、文珠荘の下、第一グランド横、七種山（バイオトイレ）等に作りました。

観光客や町民に町内を散策して楽しく健康的な一日を過ごしてもらうためにも、トイレは必要でしょう。

③ カッパの出没

今、全国的に辻川山の麓の小さな池のカッパが人気となっています。

この池は水が濁っていて泳いでいる美しい魚の姿が見えません。透明度を高めるために、いろいろと努力をしてもらいましたがだめでした。考えを変え、逆転の発想で濁っていることを利点にしようと思い、隠れているカッパを出没させては、ということになりました。

町職員が知恵を出し合い、たくさんの人の力を借りて、試行錯誤をしながら作ってくれたのがカッパの装置です。そして、カッパの姿をかわいいフクちゃんのような姿か、妖怪風の怖い姿にするかで議論があり、私が決めることになりました。柳田國男の『故郷七十年』に出てくるのは、いたずらをするカッパなので、怖い方に旗を上げ、今に至っています。

間もなく天狗も出没すると聞いています。楽しいことです。

④ 学問成就の道

辻川山の南面に鈴ノ森神社、北東に北野の天満神社があります。鈴ノ森神社は柳田國男兄弟が幼少の頃、木登りや狛犬に乗って遊んだところであり、天満神社は学問の神様の菅原道真を祀っているところです。この二つを道でつなげてお参りすれば、きっと御利益があるのではないかと考えました。教育委員会が中心になって構想を練り、柳田五兄弟の胸像を配置するなどして、立派な「学問成就の道」が完成しました。

きっといい名所となり、学問の向上や合格を願う人々で賑わうだろうと期待をしています。

⑤ 岸上大作望郷の丘

岸上大作は福崎町に生まれ、福崎高校から國學院大學に進みました。私よりは3歳下で同じ高校に学びながら面識がありません。残念なことです。高校時代から、全国的な歌壇で認められ将来を嘱望されていましたが、安保闘争の最中、自ら命を絶ち帰らぬ人となりました。

辻川山の山頂で、彼のお墓や今はなき生家を見下ろす位置に、この丘は作られています。

⑥ 三木家の購入と大改修

大庄屋三木家は辻川文化の中心的役割を果たし、今も三木家を除いて福崎の文化を語ることはできません。三木家を保存し後世に渡していくことは大切な仕事と考えました。土地を購入し、約2億円と5年の年月をかけて、一期工事が今年度に完了する予定となっています。平成29年度からは三木家を活用した多彩な行事が展開されることになり

ます。

たくさんの費用を使わせていただいたことに心が痛みますが、きっとそれに勝る効果が生まれるのではないかと楽しみにしています。

⑦ 遠野市との友好都市の絆

福崎町は柳田國男が生まれたところ、遠野市は『遠野物語』の地です。柳田國男の縁で友好の絆を結ぶことができないかと考えていました。本田市長にその思いを伝えたところ、こころよく応じてくださいました。平成26年8月23日に友好都市の文書に調印をいたしました。

これによって、両市町の間で文化、産学の交流が進んでいます。

Ⅱ・自律(立)の心を育て 参画と協働の町づくり

20年間一貫して掲げたまちづくりの目標は、「自律(立)の心を育て、参画と協働の町づくり」でした。

私は人づくりまちづくりの原点は「村は住む人のほんの僅かな気持ちから、美しくもまづくもなるものだ」といふことを、考へるような機会が私には多かった」(美しき村)という柳田國男の言葉の中にあると思っています。

美しい村を作ろうと思う人が一人二人と多くなっていくことが、美しい村を作り上げていくのです。中でも「ほんの僅か」という言葉の響きが大好きなのです。全力を込めて努力することは理想でしょうが、これでは息切れを起こし、私に出来ることではありませんし、他の人にも勧めることはできません。ほんの僅かの気持ちを込めることなら私にもできそうに思うのです。

自律(立)とは、自分の立てた規律にしたがって、ものを考え行動することです。そんな自由で独立した人がまちづくりに参画し、力をあわせて共に働く人が一人でも多くなれば、きっといいまちになると考えました。

町民の4つの願い

まちづくりの出発は、町民の願いに応える行政をすることだと思っています。そして、その願いを次の4点にまとめてみました。

①元気で各方面で活動ができ、病気やけがをしたときは安心してお医者さんに診てもらえること

②働く場所があって、収入が保障され、そのお金を使って買い物やレジャーを楽しむことができること

③いじめを受けず、差別されず、地域、職場、学校等で仲良く集団生活ができること

④よい環境(自然、人的)の中で安心して生活ができること

以上の願いに応えるため、私は「憲法を暮らしに生かす」と言い続けて町政に取り組んできました。

そして、私なりに町政分析をおこない、福崎町で当面取り組むものとして、次の面を重視して取り組めばいいのではないかと考え、

1. 科学の心で知を力にしたまちづくり
2. もてなしの心で共に生きるまちづくり
3. 食育で健康なまちづくり
4. 地産地消で活力を育てるまちづくり

の4本の柱を建てました。

科学の心で知を力にしたまちづくり

覚悟はしていたのですが、登庁するとたくさんの課題が山積していました。来年度の予算編成、公共下水道の推進、もちむぎ食品センターの運営改善などです。

財政、会社経営、下水の処理方法など知らないことばかりです。知識と情報がなければ、きちんと対処できません。

「知を力」には私のためにも必要だったし、住民サービスを向上させるためにも必要でした。住民サービスの中身は「住民のいのちと暮しを守るため」の知識と情報です。役場に勤める者は常に知を磨き、情報を蓄積する努力をしなければなりません。

そして、小中の全国の学力テストの結果を知って、町ぐるみで学力向上に取り組まなければと思いました。図書館の建設にこだわったのは、図書館が「知を力」にする中心的な役割を果たしてくれると思ったからです。

「知を力」の上に「科学の心で」

を付け加えたのは、福島原子力発電所の事故があったからです。

私は80年の生涯で二つの神話に裏切られました。一つは神風神話です。小学校のころ親からも、先生からも、日本は神国だから、いざという時には神風が吹いて敵をやっつけてくれるので戦争には負けないと教えられてそれを信じていました。

もう一つは原子力安全神話です。原子力は安価、安全だから安心だといわれていたので、あんなに大きな被害が出るとは考えたことがありませんでした。

ものごとは一方だけから見てはいけない、多面的（科学的）に見ないといけないと気づいたのです。

もてなしの心で共に生きるまちづくり

資本主義の発展で成熟社会と言われます。そしていま、政治も経済も新自由主義の立場で運営がすすめられています。新自由主義とは、「強い者が勝って当たり前、弱い者は淘汰されてもしかたがない」という弱肉強食の立場です。ここでは共に生きることよりも競争に勝つことのほうが重視され、絆はずたずたにされています。

まちづくりで大切なのは、あいさつを交わしみんな仲良くすることであり、向こう三軒両隣が助け合って絆を強めることなのです。

食育で健康なまちづくり

福崎町でこの目標を立てたのは、一般的に健康なまちにしようということに加えて、小学生男子が兵庫県で一番メタボ率が高いという数字が出たからです。メタボは成人病になりやすいといわれています。この不名誉な数字を解消するためには、学校だけでなく、まちをあげて取り組まなければならないからです。

他方いい面では、福崎町の特産品の「もち麦」が美容と健康によいβ－グルカンを多量に含んでいるとＮＨＫテレビで放映されたことです。このもち麦を町内でもっともっと普及させ全国に発信していかなければなりません。

地産地消で活力あるまちづくり

地産地消はその土地で収穫した農産物をその地で消費することを指しますが、もっと広くとらえて、福崎町の人、物すべてに光を当て、活用して活力にしていくことです。最近、地方創生といわれ全国的な取り組みとなっています。

辻川山の麓の小さな池にカッパを置き観光客を呼んでいます。こんな工夫をもっと旺盛に展開しなければなりません。

私が最も重視するのは農地や山川の活用です。遊んでいる農地を活用してもっともっと農産物を増産する。その農産物を食べ物がなくて困っている国に供給することです。

首相は開発国に対してお金の支援を約束されますが、食べ物の不足する国には農産物の支援があってもいいのではないでしょうか。

日本の食料自給率は40％を切っています。これは60％は他国から食料を輸入していることになります。農地を遊ばせている日本が、世界から食料を輸入すれば、食料の不足している国はますます困ることになります。地産地消も考えて農業を守ることが大切ではないでしょうか。

地産地消をすすめることは福崎町はもちろん、日本を守ることになり、世界の平和と繁栄に役立つことになっていると思います。

福崎町の取り組むべき課題は、ほかにもたくさんありますが、私は以上の４本の柱が町の可能性を延ばす鍵と考え取り組んできました。

百人一首を通じて自尊感情を育てたい

五色百人一首教室　有川　聡

一．五色百人一首教室について

百人一首の最大の魅力は、年齢も性別もこえて一緒に取り組めることです。

練習会には、約二十人の子どもたちが集まります。

その中には、近畿地区トップレベルの選手たちもいます。近年の成績は、五色百人一首近畿大会個人戦優勝一回、準優勝四回、団体戦ベスト8二回。県大会も優勝・入賞者が多数。兵庫県では、強豪と言われるようになりました。

その一方で、ひらがなが読めるようになったばかりの幼稚園のお子さんも参加しています。札を一枚暗記したので、その一枚だけは飛びついて取っています。

そのように、年齢も学校も実力も様々な子どもたちですが、百人一首を通じて切磋琢磨し、仲よくなっています。

二．五色百人一首とは

「百人一首」というと、札を百枚並べて試合をするものだと思われるかもしれません。

しかし、百枚の札で試合をすると、札の暗記が大変、札を探すのも大変、長時間の試合で集中力が持たないという困難さがありました。それでは、子どもたちが百人一首の楽しさを知る前に、百人一首が嫌になってしまいます。

そこで、百人一首を二十枚ずつに分け、五色に色分けした「五色百人一首」が作られました。

五色百人一首では、二十枚の札だけで試合をします。そうすると、札を探すのは簡単。試合時間は、一試合わずか三分間。そのおかげで、小さなお子さんでも、集中して取り組むことができます。

百人一首が強くなるために、最も大切なのは暗記です。百枚を暗記するのは大変ですが、五色百人一首の二十枚なら短期間で覚えられます。ですから、短期間で力が伸びます。

三．五色百人一首教室の目的

この教室の最大の目的は、百人一首が強い子どもを育てることではありません。

百人一首を通して、子どもたちの自尊感情を育てることです。

百人一首は、努力すれば、確実に強くなっていきます。「努力して、それが報われた。」という成功経験をした子は、自分に自信を持つことができます。

大会に勝つことだけが、成功体験ではありません。札を1枚覚えたこと、1枚でも札を取れたこと、暗記テストに合格すること、昇級すること、練習でも様々な場面で成功体験ができるように考えています。

百人一首を通して、子どもたちの心を育てていきたいです。

練習会は、毎月第一・三日曜日の十時～十二時に福崎町文化センターで行っています。

「アートフラワー」は、アートフラワー（造花）を手造りしているクラブです。会員みんなで楽しく和気あいあいと活動しています。

工程は、白い布で型を切り、色を染め、コテを当てて花の型を整え、仕上げていきます。四季折々の種類の花を造り、出来上がると家の中に飾ったり、知り合いの方にプレゼントしたりして喜んでいただけています。

私事ですが、三十五年間、アートフラワーの指導を続けています。現在、第一・第三土曜日の午後に文化センター二階和室で活動しています。

お花の好きな方、何か趣味を持ちたい方、私たちとアートフラワーを造ってみませんか？素敵なアートフラワーが日々の生活に彩りをもたらしてくれます。ぜひ、一度見学にいらっしゃってください。

第三十四回 福崎町美術展作品募集

第三十四回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。

皆様方のご応募を心よりお待ちしています。

◆会期 平成二十八年
五月二十日（金）～
五月二十二日（日）

◆会場 福崎町エルデホール

◆主催 福崎町・福崎町教育委員会

◆部門 日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る。

◆作品搬入
平成二十八年五月十四日（土）
午前九時～午後四時

◆審査員
日本画　平内　安彦
洋　画　初田　　寿
書　福島　松韻
写　真　柳原　　香
彫塑・工芸　山本　和子

山桃忌奉賛 第三十一回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家記念館により山桃忌が行われています。

短歌祭は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌の当日に行っています。

本年の短歌祭は、左記の要領で作品を募集します。

記

日　時 平成二十八年八月六日（土）
場　所 福崎町文化センター
主　催 福崎町文化協会・福崎短歌会
作　品 未発表のもの・一人二首以内
応募料 一首につき五百円
要　領 原稿用紙に楷書で縦書き
宛　先 福崎町文化センター内
文化協会事務局　宛
締　切 平成二十八年六月三十日（木）
賞 通泰賞・町長賞・議長賞・教育長賞・文化協会長賞・商工会長賞・ＪＡ兵庫西賞・神戸新聞社賞の各賞と佳作多数
選　者 楠　田　立　身　先生
（兵庫県歌人クラブ顧問）

表紙の写真

辻川山（西田原）の山頂に、昨年三月に完成した展望スペース「望郷の丘」からの眺望です。

福崎町出身の歌人・岸上大作を顕彰するため建設されました。大作が生まれ育った井ノ口地区が一望でき、壁面には大作の写真と故郷を詠んだ短歌が焼き付けられたタイルが掲げられ、功績をしのぶことができます。

展望台のベンチに座って、生家跡や福崎高校、岸上家の墓所など、ゆかりの場所に大作の生涯をたどり、今なお多くの人の心をとらえて離さない大作の短歌を口ずさんでみてください。

編集後記

たくさんの方々のご協力により、福崎町文化第三十二号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には大変お忙しい中執筆いただき、ご協力くださいましたこと厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。